

和泉式部家集配列にみる創意性について

金子紀子

一 はじめに

和泉式部家集の歌の配列に創意工夫が看取される一連のまとまりのある歌が何カ所に見られる。これは詞書によつて時間と状況が展開してゆくもので、詞書から一連の歌群であると認定し、そう読んだ時にひとつのまとまったエピソードが浮かび上がって見える、主に五首から九首の歌群である。

これらの歌群は人とかかわりの中で詠まれた和歌に認められる。むろん贈答歌を含む歌群もあるが、むしろ複雑な人間関係を詞書が象り、そこに伴う心情の推移が和歌一首一首に詠み込まれ、展開する和歌の中にひとつのエピソードが認められるのである。

また、和泉式部集の特徴として重出歌の存在があるが、この歌群についても重出している場合がある。重出歌の存在する歌群に

おいて、両者を比較してみると詞書や配列に違いが見られ、そこに意図的と思われる創意が見て取れる場合がある。その創意によつて単なる歌の羅列ではない、まとまった歌群をそれぞれなしており、それぞれ二種類の作品として収載されていると考えられる。

これらの歌群からエピソードを読み取れるのはおもに、詞書と配列に創意工夫を加えることによるものであると考えられる。

和泉式部の場合、『和泉式部日記』の作者としての資質、すなわち『和泉式部日記』がもつ、散文と和歌の構成で虚構性を描きうる人物であることを勘案すれば、家集の中にもそれに近い一連の歌群があつてもおかしくはない。むろん、『和泉式部日記』中に「女」という三人称的記述が見られることと、作者が知り得ない宮側の場面が描かれていることから「物語」か、「日記」か、他作か自作かという論議を呼び起こし、多くの先達の諸研究により、現在は「日記」であり、「自作」説で落ち着いていることを前提とし

ての推察である。歌群についても、すでにいろいろな立場からアプローチされている。そのような先行研究を踏まえながら、まずはこの家集の中の一連のまとまりのある歌群のそれぞれの詞書と配列から、創意性を考察したい。

和泉式部の歌の本文と主に引用した和歌の本文については以下の通りである。次のように略称で表記する。

* 『和泉式部集・和泉式部統集』清水文雄校注 岩波文庫 一九

八三↓和泉式部集（統集も含める）

注の引用 ↓『文庫』

* 八代集 『新日本古典文学大系』（岩波書店）

なお、各勅撰集は古今集、後撰集のごとく略称を用い、『』はつけない。

* 引用した歌、及び家集で「注」の表示がないものは『新編国歌大観』（日本古典ライブラリー）を典拠とする。

* 『日本国語大辞典』『全文全訳古語辞典』『国史大辞典』は Japanknowledge からの引用である。

二 歌群の考察

まず、重出歌が存在する一連の歌を見る。（歌群の名は、試みとして私に付した）。

① 稲荷祭の歌群

i

稲荷祭見しに、傍なる車の、粽など取り入れて苦しきを、
まろが車に取り入れしと、公信の少将、藏人の少将言ひけ
ると聞きしを、一日祭見るとて車の前を過ぐる程に、木綿
かけて取り入れさせし

108 稲荷にも言はると聞きしなき事を今日は糺すの神にまかする

返し

109 何事と知らぬ人には木綿襷なにか糺すの神にかくらん

と言ひたれば、幣のやうに、紙をして書きてやる

110 神かけて君はあらがふ誰かさはよるべに溜まるみづと言ひける

かへさ、故殿の鶴君の、筒を借りて轅をかけ給へりし、

「異人にはさらに取らせねども」とて言ひやりし

111 異人は許さざらまし木綿襷かくる車のながえなりとも

雅通の少将など乗り給へりし、それや詠みけむ

112 木綿襷かくる車のながえこそ今日のあふひのしるしとは見れ

ii

稲荷祭見る女車のありけるを、「その人なめり」と、或君達
の言ひけるを聞きて、祭見る車の前より、男の過ぐる程に、
木綿につけてさしつれ

1275 稲荷にも言はると聞きしなき事を今日は糺すの神にまかする

返しに、いみじうあらがひたれば

1276 神かけて君はあらがふ誰かさはよるべにたまるみづにいひけん

この歌群は稲荷祭での出来事を発端に、その後の葵祭の道中で
の公達との贈答へと発展する歌群である。

稲荷祭は「京都の伏見稲荷大社祭礼。古くは四月上旬の日を式
日とした」（『国史大辞典』）とある。粽は『延喜式』三十三大膳
下五月五日節料」として粽の材料の記述があり、「三十九内膳諸節
供御料」には同じく粽の料の記述のほかに、「右從三月十日迄五月
卅日供料」^{注1}とあるので、五月五日以前にも供物として作られてい
たことがわかる。（この歌の場合は飲食のためかもしれないが）

「一日祭見る」の祭は賀茂祭（葵祭）のことで「古くは単に祭とい
えばこの祭を指した」（『国史大辞典』）とある。

108 番の詞書はこの稲荷祭見物の道中、傍らの車が粽などを取り
入れて見苦しかったのを、私（和泉）が車に取り入れたと公信少将
（藤原公信）と「蔵人の少将」が言い触らしているというのを聞いて、
その後のある日祭（葵祭）を見る際、少将の車が前を通り過
ぎる時木綿をかけて取り入れさせたとある。

108 番の歌は、稲荷祭の時にありもしない事を言われたのを今日

は糺すの神（賀茂神社）に任せて真否を判断してもらおうと詠んで
送ったところ、109 番自分は何のことかわからない、あなたは何を
神を引き合いに出して糺すのか、と返事が来た。（詠者は公信か）

110 番は神をかけてあらそうのですね。ではだれが見た（「よるべ
の水」は「神前に置かれた瓶の水」で「見つ」にかける）と言っ
たのでしょというのが前半のやりとりである。ここは同世代の
若い貴族達とのたわいのないやりとりである。粽は食物として車
に取り入れたのか、あるいは供御なのか、それが話題になるのは
和泉式部であるからであろうか。いずれにしても何かの罪を犯し
たわけでもなく、大げさに神かけてあらそうほどのことでもない。
要するに掛け合いを楽しんでいるのである。ここまでが前半のエ
ピソードである。

次の二首は祭の帰りの出来事を詠んだ歌である。

111 番の詞書は、『和泉式部集全釈』^{注2}（以下『全釈』）は「かへさに
殿の鶴君の」に改めてある。それは「こ」と「に」は誤写がおき
やすいこと、「殿」は時の執政者に使われ道長のことであるが、
「故殿」で道長の死後のこととすると「鶴君」はすでに「関白頼通」^{注3}
であり、おかしいとされている。原典「榊原本」を確認したとこ
ろ、「こ」と「の」間に少し空白がみられ、これは「ことの」と
続けるよりは「に」の方が良いと思われるので『全釈』に従いた

い。祭の齋院の帰りの見物に鶴君の車が和泉の車のこしきにながえをかけたのを、他の人なら決して取らせないのですが、と言って車の中に送った。そして111番の歌は他の人だったらたとえ神事のための木綿だすきをかけた車ででも許さないのですがと詠む。

112番は雅通の少将などが乗っていて、その方が詠んだのだろうかと、和泉式部の言葉が詞書としてあり、歌は雅通の少将とおぼしき人の返歌で、木綿だすきをかけた車の轅をかけるのを許すだけでなく、車の「なかへ」に入ることとを許されれば今日の「葵」(逢ふ日)の御利益と思うのだがと詠んでいる。

この後半のエピソードは道長の鶴君の車に同乗していたらしい、源雅通とのやりとりである。「異人にはさらに取らせねども」という詞書や歌の内容は、時の執政者の長子に向けての歌ではなく、多分そこにいるとわかつての雅通に贈ったものではないだろうか。雅通の歌は少々恋歌めいており、「それや詠みけむ」と雅通のことをぼかしている。後述するように源雅通は和泉式部の恋人の一人と思われ、最後は恋の雰囲気が終わっている。

次にiiの二首であるが、ここでは、公達の名もなく、棕云々の記述もない。この歌だけ見ると、稲荷祭に本人は行っていないくて、他の女の女車があったのを「その人なめり」と「或君達」が言っているのを聞いたのを、とがめた歌というように取れる。ここで

は109番の歌は省かれて、代わりに「返しに、いみじうあらがひたれば」、の中に意を含み、1276番の歌を詠んだということで、雅通の少将のエピソードはない。

このことは平田喜信氏が家集の重出構造について言及された論文「和泉式部集の構造―集内の重出現象をめぐって」^{注4}の中で、乙類(B群99+236番)とされた歌群の中には贈答歌が多数おさまられているが、丙類(E群400+902番 F群903+939番、H群1063+1333番、I群1343+1470番)の歌群では、贈答歌は皆無であり、ある意図のもとに他人詠が省かれている、また具体的な人名は臚化されているなどから、「乙類・丙類間には、贈答歌を採録する方針の上で大きな差異があつたと見なさなければならぬ」と(括弧内アルファベットは清水文雄氏の分類)^{注5}されている一つの例であろう。この二首はH群内にあり、この研究に即して考えれば、iの歌稿をまとめる際、原歌集で二つの歌稿があつたのを「想い出」としてまとめた。続集iiを採録する際はiiと共通の母体ではなく、はじめから雅通との贈答の歌稿がなかったと考えることもできる。この重出歌の出現に関してはいくつかの先行研究があり、この歌群に言及されている研究もあるが、ここではその詳細は紙数の関係もあり、該当箇所での引用にとどめておく。以下、内容の考察に入る。

藤原公信は『枕草子』の九五段「五月の御精進のほど」^{注7}にある

面白いエピソードが有名である。この公信は貞元二年（九七七）生ゝ万寿三年（一〇二六）で、父は藤原為光、母は藤原伊尹女。

長保元年（九九九）に少将、長保四年（一〇〇二）の二月五位藏人、寛弘元年（一〇〇四）中将、その後藏人頭、参議、春宮権太夫、左兵衛督、などを経て最後は從二位、權中納言となっている。^{注8}重用されたようで、『權記』にもたびたび記録が出てくる。

源雅通は生年未詳ゝ寛仁元年（一〇一七）、道長男鶴君とは、鶴君の母方祖父源雅信を同じくし、從兄という間柄であつた。長保三年（一〇〇一）右少将（この時は公信とともに右少将）、寛弘二年（一〇〇五）右少将で五位藏人、長和元年（一〇一二）、中将となる。『權記』には、長保三年に「賀茂祭右近衛府使」を務めていることが記述されている。^{注9}

雅通は「源少将」として『紫式部日記』には寛弘五年（一〇〇八）中宮彰子の敦成親王出産の折の記述にしばしば名前が見え、『和泉式部日記』にもそれらしき人物がでてくる。『和泉式部集』には255、256番の贈答歌があり、恋人のひとりだったらしい。

次に「藏人の少将」は従来「公信の少将」の注記であると通説になっているが（『全釈』）、青木賜鶴子氏が、この説に疑問を呈され、「公信の少将」と名前が明示されているのに「藏人の少将」と注記するのは不審であるとして、本文通り「公信の少将」と「藏

人の少将」と二人と解釈する可能性を指摘し、公信が少将であつた時期に藏人の少将であつた人物のうち最も可能性のあるのは藤原重家であるとした。そして青木氏は公信が少将になつたのが長保元年（九九九）の九月で、重家が藏人の少将であつたのは長保元年一月で、四月の祭りの時はまだ公信は少将になつていなかった点については、見方をかえて、この詞書が公信が少将になつたあとに書かれたと考えてみてはどうか、長保元年十月であればまさしく「公信の少将、藏人の少将」と呼ばれ、二人の呼称は問題はないとされている。^{注11}

ただ、重家は左少将藏人少将になつたのは長保元年であるが、三年（一〇〇一）二月には出家している。後半の歌の「雅通の少将」は長保三年から公信と同じく右少将になつていて、重家と重ならないが、この点も雅通が少将となつた後に書いたという可能性も考えられると青木氏は論じられている。歌稿をまとめる時にはその時の知られた呼称で書いたと考えて、この論文ではこの歌群の対象時期は、たづぎみ（道長男 頼通）元服が長保五年二月であるので、長保元年から四年の賀茂祭のできごとであり、実際に歌として詠まれたものを一連の作品としてまとめたのは雅通が少将となつた長保三年以降としている。

ここで取り上げられている藤原重家は「貞元二年（九七七）生

で、公信と同年生まれ、父は藤原顕光、母は村上天皇親子内親王（或は盛子内親王）で、長徳三年（九九七）左少将、長保元年（九九九）五位藏人、長保二年従四位下になり左少将美作守、長保三年二月に二十五歳で三井寺で出家している。^{注12}『権記』には長保元年十二月一日に藤原実成と藤原重家の従者同士の闘乱があったことの記述が詳しくあり、十二月四日に勘当を蒙っていることがわかる。藏人の少将であつた時期は長保元年の一年間であつた。翌年一月に従四位下になり美作守に転じている。

「藏人少将」を「公信」の注記と解釈するのであれば、他の人を考えるまでもなく、後半の歌の「雅通」も少将であつたときに、「公信」が「藏人の少将」でなければ詠歌状況が一致しない。「公信」が藏人少将となつたのは、長保四年二月のことであり、この時間じ左少将として「雅通」も名を連ねている。^{注13}ということとは、「たづきみ」元服以前では長保四年四月の賀茂祭の時しかあり得ないということになる。

また、「公信」と、「藏人の少将」が別人であり、藤原重家を考えるのであれば、青木氏の指摘される長保元年の十月以降にその年の四月の賀茂祭のことを詠んだか、長保二年の四月の賀茂祭が有力になる。というのも、重家はこの年の一月に従四位下に叙され、五位藏人の少将ではなくなっているが、このあとに続く藏人

と少将を兼任した人は公信までいないので、この四月の時点で一月まで藏人であつた重家のことをまだ藏人の少将と呼んだとも考えられなくはない。『権記』で重家の呼称を調べると、長保元年（九九九）十二月四日に「藏人少将（重家）」の記述があり、そのあとは「少将重家」の記述がつづき、長保二年（一〇〇〇）十月十七日「先少将重家」、翌年重家出家ののちは「入道少将」となっている。この記述を見れば、藏人の少将の呼称は長保元年しかないのだが、青木氏の論にあるように後から記述したとなれば、記憶として長保二年の四月の出来事であるが、「少将」と呼んだ可能性も考えられる。

「雅通」は長保二年の時点では少将になつてはいない。雅通が少将であるのは長保三年であるので、鶴君の元服の長保五年（一〇〇三）二月以前、長保三年か長保四年の賀茂祭ということになる。そうすると長保三年四月二十日の『権記』にみる、「辛酉賀茂祭／無常の観を催す為に見物」に行成が賀茂祭を見物し、車を数えたという記述に「右近衛府使は少将源朝臣雅通」とあることが有力な時期であるが、長保四年の賀茂祭でも可能である。

和泉式部は公信とほぼ同じころの生まれである。和泉式部はこのころ既に橘道貞と結婚し、小式部も生まれている。長保元年二月には橘道貞が和泉守になり、長保二年（一〇〇〇）秋か前年秋

には和泉国に下ったこともある。長保三年（一〇〇一）には為尊親王との恋愛が始まっていたと見られる（以上『和泉式部日記』卷末年表^{注14}、長保四年（一〇〇二）六月には為尊親王の薨去があり、長保五年（一〇〇三）四月には敦道親王との恋愛がはじまる。長保年間は和泉式部の人生にとって大きな出来事が多くあったのである。和泉式部からみると、長保二年から四年の四月の賀茂祭は可能性がありそうである。このころには道貞との仲はすでに冷えていたとされる。

歌の詞書には、人を表記するために名前ではなく当時の官位名が書かれることは通常のことであるが、詞書に二人以上の名前が並列されている例及び注記をつけている例などを、同時代の私家集の中から探ってみると次のような例が見られた。

『馬内侍集』82 左大臣、兵衛佐にておはせしき^{注15}

『朝忠集』77 朝忠朝臣、重光の朝臣の歌ふたつ^{注16}

『赤染衛門集』3 中関白殿の藏人の少将と聞し頃^{注17}

17 六条の源中将と経房の中将と

『公任集』87 中宮大夫、たゞ今の大殿^{注18}

302 宰相中将いれり、たゞのぶ

今のところ管見の限りでは以上のような例があるが、和泉式部の歌に近い例は『赤染衛門集』17であろう。『馬内侍集』82、『赤

染衛門集』3、『公任集』87³⁰²は注記であるが、注記にはそれなりの書き方があることがわかる（『公任集』³⁰²は傍注本文化という）。

以上のことを踏まえて、稿者は「公信」と「藏人の少将」は別人であると考えたい。それはこのような事実関係のみからではなく、和泉式部の歌の詞書の中の実在の人物名が多くでてくるが、このような、同じ人についての注記が本文となっている例がないからである。「越後守のりなが」「東宮のなおただ」「監物ゆきつね」など役職を付した名前は出てくるが、「よりのぶ」「みちなり」という名前に役職や官位名を追記している例がない。逆に「権中納言」「讃岐殿」「内大臣の若君」「近江大夫」などに名前の注記をつけることもしていないのである。「公信」が「藏人少将」であったのであれば、「藏人の少将公信」とでもありたいところである。当時、やはり『権記』によれば公信はこの時期活躍中で、特に注をつける必要はなかったであろう。この「藏人の少将」が「藤原重家」という見解は青木氏に従いたい。

（追記 なお、平安中期の貴族である藤原頼任の初名が公信で、長保二年四月に藏人所雑色に任じられ、『権記』「頼任は元の名は公信。」という記述がある。また、『御堂関白記』には寛弘二年の正月十日の藏人定があり、「右近少将雅通・文章生藤原頼任・雑色 源頼国であった。」という記述がある。詞書との関係は不明）

和泉式部の歌に戻ると、ここでは前半と後半と別々のエピソードが語られている。

前半は歌に「糺すの神」の語があるから、賀茂神社の祭であることは確認でき、後半も同じ「祭のかへさ」で「あふひのしるし」が詠まれているので、同じ賀茂神社の祭である。

先述したように、公信と重家が関わったエピソードは長保元年か二年のこと、後半のエピソードは長保三年か四年の賀茂祭であるとすれば、この一連の歌は前半と後半が別の年の賀茂祭のエピソードだったと考えられないだろうか。そうすると官位呼称についても矛盾がない。前述したように、前半は同世代の公達とのたわいのない贈答、後半は雅通との恋歌めいた贈答で、最後は和泉の歌ではなく、雅通の歌で「あふひのしるし」という誘いの歌でまとめられており、前半とはやや違う雰囲気が終わっている。

和泉式部が祭の時にとやかく言われる状況はたびたびあったのか、^{注19}同じような歌が他にもある。

宮の御服にて物見ぬ年、禊ぎの日、「人の車にそれぞと聞くはまことか」と問ひたる君達のありけるを、後に聞きていひやる

1060 それながらつれなき物もありもせよあらじと思はで問ひけるぞ
憂き

賀茂の道に詣であひて、「語らはん」などいふ女の、「だれぞ」と問ふに、異人の名のをしたければ、この人もまたさやうに言ひしを、かたみにそれを聞きて、後にやりし

1070 我に君劣らじとせし偽りをただすの神もなのみなりけり

また、祭帰りだけを詠んだ歌も和泉式部集のほかにも見られる。祭の帰さるるに、齋院の御車の中に、知りたる人のもとに、葵に書きて

1082 昨日今日行きあふ人は多かれど見まほしきは君ひとりかな

この三首には、先のいなり祭の歌群と共通する点がある。1060番の人違いの噂をあとから聞くという状況、1070番の「偽りをただすの神」、1082番の車の中の「知りたる人のもとに」手紙やる、そして歌を詠んだ主体は違うが、恋歌仕立てであることなどである。これらの歌を見ると、いなり祭歌群を編む下地となるようなエピソードはいくつもあったわけである。同じ長保年間の、別の年にあった出来事を詠んだふたつの歌稿をまとめ、その結果、雅な葵祭を背景にひと日の若い貴頭との交流のエピソードが語られることになったのではないだろうか。それは和泉式部にとって楽しい想い出だったのに違いないのである。

この歌群の面白さは詞書にもある。108番の粽を取り入れたのを見苦しいと思う、そしてそれを自分がやったと疑われたのが悔し

いと思う和泉式部の感覚が描かれていること、噂を打ち消すべくあとからわざわざ糺すの神にかけて歌を詠む、というのとても興味深い。また「幣のやうに、紙をして書きてやる」というのは具体的にどんな形状なのかよくわからないが、祭に因んでただの手紙ではなく幣にするとともに面白い。帰りのエピソードも「筒を借りて轅をかけ給へりし」は、時の権力者の嫡子が和泉式部の轅を借りるということも、車が大勢いる中で和泉式部の車を選んだのは偶然か、実は雅通が車を手引きしたのか、その辺りもよく考えるところとおかしい。112番の前の文「雅通の少将など乗り給へりし、それや詠みけむ」は、詞書ではあるが、雅通のものではなく、これはこの歌と前の歌の続きをよくするためか、詞書のない歌に和泉式部が挿入した一文であろう。

以上のようにこの歌群には配列に工夫が見られ、詞書にも虚構性がある。この稲荷祭に端を発した一連の歌を和泉式部本人によってまとめられたとして、その意図とするものは、自身の物語志向による創意と考えたい。

②御嶽精進の歌群

次にあげる贈答歌群は既に一度でふれているが、配列の創意性に注目してもう一度考察する。

男の、御嶽精進とて、ほかに□□□みあれの日、葵に挿して

1246 かぎせどもかひなき物はおのが引く標の外なるあふひなりけり

五月五日、雨のいみじう降る日、独り言に

1247 今日のはなほあやめの草のねどころも水のみ増る心地こそすれ

六日、この精進する男のもとより、「昨日のあやめも知らで過ぐして」などいひたれば

1248 うたた寝にやがて淀野も見ぬ人はまして何てふあやめは知る

詣づる程になりて、道のほどを着るべき狩衣なむ様な物縫はする、やるとて

1249 うち交はし夜着るまじきあさ衣は縫ふも物憂きものにぞ

ありける

とてやりたれば、狩衣を「着よく、肩などもよし」といふ事をいひたれば

1250 かり衣我によそふる物ならば袂よくしもあらじとぞ思ふ

縹の帯の所々かへりたるを着替へて、男のおこせたとれば

1251 馴れぬれば縹の帯のかへるをしかへすかとのみ思ほゆるかな

御嶽は「大和（やまとの国＝奈良県）の吉野山の最高峰、金峯山の別称」で、御嶽精進とは、「金峯山に参詣する人が、それに先だつて、五十日または百日の間身を清めて読経・写経などの修行

すること」である（『小学館全文全訳古語辞典』）。「みあれ」は「みあれまつり」で、「京都の賀茂別雷神社（上賀茂神社）葵祭りの前儀として行われる神事」であり、「古くは四月の中の午の日に行われた」という（『日本国語大辞典』）。

詞書の一部は判別できないが、おそらく、「みあれ」の日に男は御嶽精進中でよそにいたので、逢う事が出来ないため、葵に挿して歌を贈った、ということだろう。その¹²⁴⁶番歌は、葵をかざしても甲斐がないものは、おのれ（あなた自身）が引いた標の外にある葵（逢う日、逢瀬）であることだ、ぐらゐの意になる。「おのが」は「自分が」の意であるが、精進潔斎中であるのは、男であり、おそらくそれ故に「逢ふ日」に逢えないということを言ってきたのであろう。それに対して贈った歌と考えれば、「標を引いたのはあなた自身でしょう」という意をこめて、「おのが引く」と詠んだのではないか。また、「標のほか」は和泉式部集では中宮彰子との贈答で、中宮彰子が「標の外」、和泉式部が「標のうち」（464、465番）と詠んでいる。この場合は「御殿」の意で葵祭りの日の贈答である。このほか、『源氏物語』にも見えるが、『傳大納言母上集』^{注21}には「ある人、賀茂の祭の日婿取りせんとするに、男のもとより、あふひうれしきよいひたりける。人に代はりて 7頼みすな御垣を狭みあふひ草標のほかにもありといふなり」という忠告のよ

うな歌がある。ただし和泉式部の歌の場合、私（和泉）は「標の外」で会えないが、男は標の内にいる他の女とは逢っているのだ、との含意までは考えなくて良いだろう。

この¹²⁴⁶番は、¹²⁴⁸番の詞書に「この精進する男のもとより」とあるので、同一の人物との関係を詠んだ歌群の、最初の歌と考えられる。男は精進を理由にずっと和泉式部（女）のもとを訪れていないらしい。

それからしばらく時間を経て、¹²⁴⁷番は、雨が強く降る五月五日の「独り言」で、今日は一層あやめ草の根のはった所も雨で水が増さるように、自分の寝所は涙のみに増して流れる、ぐらゐの意。男からの何の音沙汰もないなかでの、鬱々とした心情を歌う独詠歌である。五月五日は人々が菖蒲の根を贈りあい、「あやめ」によそえて歌を歌う端午の日であるだけに、その日も忘れられていた悲しみが募るのである。そして男は、「独り言」を歌った翌六日になって、「（精進中で）昨日のあやめも知らないで過ごしてしまつて」と言い訳を寄越した。来られない場合は便りだけでもよこすのが「折」をわきまえた行為である。一日遅れてしまつたが、「折」を知る身だとのアピールであろうか。¹²⁴⁸番は、それに応えたもので、「うたた寝をしていて淀野の夢も見ないような人は、まして淀野に生えているどの菖蒲がわかれるのか」と、ぐらゐの

意。この「あやめ」は「文目」であるが、淀野（夜殿との掛詞）に気づかれず生えている菖蒲（和泉式部自身をよそえる）のことでもある。

このあとに続く¹²⁴番、¹²⁵番、¹²⁵番は前三首と違い、男（夫）の衣装を調える妻の歌である。¹²⁴番は「詣づる程になりて」と、精進があげ、いよいよ金峰山に参詣する日が来ると、男から道中着る狩衣の仕立ての注文が来た。縫ってそれを送る時に、「袖を交わして夜着ることなどない麻（朝）の衣は縫うのもつらく、気の進まないものだったのですね」と歌を添えて贈る。

男が衣装を注文する歌には『業平集』³⁸に、「宮仕へしける人をかたらひけるに、『装束調じておこせ給てむや。さることする人なくて、いとなむわびしき』といひやりたりければ」という詞書の歌がある。また、後撰集卷第十一恋三734番小野遠興がむすめ「離れがたになりける男の装束調じて送れりけるに、『かゝるからに、うとき心地なんする』と言へりければ」があり、男の方から乞う場合と、女からの贈り物である場合とあるようである。いずれの場合も衣装は日常のものではあるが、男女の仲のかけひきに重要な小道具であるようである。

¹²⁵番の「着よく、肩などもよし」は、催馬楽『夏引』の引用であるということ（『文庫』脚注による）、本文によると「汝麻衣

も 我が妻の如く 袂よく 着よく肩よく 小領安らに 汝着せめかも」の部分をもととする。この催馬楽は、「絹の生糸を以て織って着せてあげよう、だから妻と別れよ」と迫る女に、「麻衣で結構。

（麻衣は）我が女房の如く、袂もよく、着やすく肩の具合もよく衿もゆるやかで」と、誘惑を女房のためにはねつける歌謡。これを引いたのは、当然「我が妻の如く 袂よく」を言うためで、このような調子のよいほめ言葉を送ってきた男に対して、返歌¹²⁰番は直訳すると「かり衣を私にたとえるならば、袂よくもあるまいと思います」となる。この「袂よくもあるまい」を『全釈』は「だって、わたし、あなたに他の女の誘ひをはねつけさせるだけの力もない仮の妻なのですから」の意と解釈しており、『文庫』は「狩衣は括り袖であるのに対して、女の衣の袂が広いところからいう」とする。『文庫』の説に従い、麻の狩衣を自分の女房のように、袂がよくて、と言っているけれど、狩衣の袂は私の袂とは幅がちがいますよといなししていると。女の誘惑を断ち切った催馬楽『夏引』の男に、自分をよそえる男（夫か）のいうことは、狩衣を女の衣装によそえたのと同様に、信用ならないと言うことであるうか。

次の¹²⁵番の詞書と歌にある「縹の帯」は、縹色（浅葱色）に染めた帯で、やはり催馬楽『石川』の、「石川の 高麗人に 帯を取

られて からき悔する いかなる帶ぞ 縹の帶の 中はたいれな
るか かやるか あやるか 中はたいれたるか^{注24} によるとする
（『文庫』脚注）。『角川古語大辭典』^{注25}では「…意味不明の『中はた
いれるか』を、のちに『中や絶えたる』と解して伝え、男女の仲
の絶えることをいう歌語として多く用いた。また、その色が変色
しやすいことから、人の心の移ろいやすいこと、男女の關係の希
薄なことをもいう。」として、和泉式部の次の歌や『源氏物語』紅
葉賀卷の用例もあがっている。

装束ども包みて置く、革の帯に書きつく

1110 泣き流す涙にたへで絶えぬれば縹の帶の心地こそすれ

1251 番歌は、縹色の帶の所々色が褪せているのを着替えて男が返
してきた。それを自分たちの仲をもとに戻らせる（別れる）との
み思われると詠んでいる。色変わりした帯は、男との關係も古女
房の自分も褪せてきたという象徴のように思われるのである。

『全釈』は「わたしの文を送り返して来たのかと」思ったと解
釈している。語釈で「正集五八四に記したようにこの頃縁を絶つ
決心の時は、先方からもらった恋文を一括して返す風習があった。
それを言っているものと見て解した。」とある。正集五八四は『文
庫』で583「人の置きたりける鏡の箱を返へしやるとて」という詞
書の歌のことであるが、この歌は鏡の箱を女の側から返している

歌である。和泉式部の歌の中には傳の殿（道綱）との贈答で和泉
式部が道綱から来た手紙を返す歌に「ふみかへす」という言葉が
ある。ただ、男性から女性へ文を一括して返すということがあつ
たのだろうか。

後撰集及び、同時代の歌人の家集、『蜻蛉日記』^{注26}には、別れの際
どうするかという詞書を持つ例が散見される。まず『蜻蛉日記』
中巻の鳴滝籠りの記述のところで、作者が兼家の不実に苦しみ、
身を引くために寺に籠もろうとする時、兼家が日頃服用していた
薬を見つけ、もう兼家がかかることもないのだからと道綱に渡して
返し、別れを告げる場面がある。また、後撰集の卷第十二恋四に
803 番平なかきがむすめ「つらくなりにける男のもとに『今は』と
て装束などつかはすとて」は、女から男の衣装を返す例で、ほか
に卷第十八雜四¹²⁵³番には、女藏人の曹司に武官の装束を残したま
ま左遷された源善朝臣のもとに、女がその衣装を送ってきた例が
ある。

卷第十六雜二¹¹⁴³番では元良の親王歌で「たまさかにかよへる文
を乞ひ返しければ、その文に具してつかはしける」があり、これ
は送り手の女性（京極御息所『元良親王集』66）から返してほし
いと要求があつた例である。また、男性から女性宅に残したもの
をとりやる例は、後撰集卷第十一 718 番に伊尹の朝臣「女のもと

に衣を脱ぎ置きて、とりにつかはす」があり、『馬内侍集』186番では『いみじきことありとも、よそくにならじ』と契りける人、さしもなくなりて、置かせたる手箱をさへに請ひにおこせれば、遣るとて」という歌がある。^{注27}後撰集と同時代の主な家集を見たが、歌の詞書に見る限り、文を男性から別れるために返す例は見られないし、色褪せた「帯」で別れを示す例も見られない。

この歌の詞書の「所々かへりたるを着替へて」は、必ずしも参詣のための新しい狩衣と着替えたのではなく、普段着ている装束の帯が古びたので返してきたのかもしれない。ただ、前二首となぜ連続性があるかと言えば、新しい装束を仕立てて送ったという状況と、それを受けて「着替へて」と詞書を付した、その言葉の近似性ゆえである。そして、寄越した帯は、催馬楽で歌われる「縹の帯」であつたので、前二首のつづきの歌と読むことができる。あるいは男は催馬楽（石川）を意識していなかったのかもしれないが、和泉式部の方では、男が先に寄越した歌に催馬楽を引いていたがゆえに、今回も引いているととりなし、「かへすかとのみ思ほゆるかな」と詠んだのではないか。

前半の三首は、少し距離が見え始めた男女の贈答で、男の無沙汰に泣く¹²⁴⁷番歌は孤独と悲哀を詠む独詠である。続く歌群は、詞書が男の行動を追い、その動きにつれて女の心情が詠まれていく

形になっている。男は夫であろうか。その折々女が詠んだ歌は、相手に贈られているのだと考えられるが、男は女の気持ちにははなはだ無頓着のようである。男は女に歌を送らねばならない「折」の「みあれ祭り」と「五月五日」の二度も逃しているのである。

しかし、一応御嶽参りのための精進潔斎という大義があるからか、男は悪びれもせず、一日遅れの「あやめ」歌を贈ったり、狩衣の仕立てなどを気易く頼んでいる。また女も、男から道中の支度を頼まれること自体は悪い気はせず、男の支度を調べてやつている。男としては無視している気はなく、催馬楽を持ち出してほめるなど、相応の相手として扱ってはいるのであろう。ただ、長い間、女のもとを訪れていない事実は事実なので、女の歌はやや自嘲的であるし、最後の歌は諦めにも似た感慨で終わる。妻は家刀自としての役割を果たしつつ、女性としてはあまり顧みられない孤独な心情を詠んでいるのである。

この歌群の創意工夫という点においては、二つの観点から意図を感じることができる。

ひとつは、この歌群は時間の推移をたどつてみれば、行動しているのは男だけなのであるが、「みあれ」の日は前述のように四月の中旬で、男はそのころ御嶽精進のために、五十日とか百日の潔斎であつた。それから半月ほどして五月五日、六日の菖蒲のや

り取りがあり、それから精進潔斎があけて、狩衣の注文、仕立て、それを送る、さいごに着替えた纏の帯が返ってくるという、かなりの期間がこの経緯に必要である。これらの期間の間にいくつもの別のできごとがおそらくあっただろうが、この男とのやりとりだけをまとめたことは既に事実を越えた意図的なものがある。

また、もうひとつは詞書と歌の配列の工夫である。この歌群は詞書の示す折々に詠まれたものであろうか。あるいは、手許の歌稿に詞書をつけてまとめたのか、いずれにしても連作として一挙に詠まれたものではないだろう。配列と詞書の工夫があるからこそ、一連のエピソードとしてまとまり、歌群として内容が面白いものになっている。

よく見れば、¹²⁴⁶番は単独でも成り立つ歌であり、¹²⁴⁷番は「ひかれぬあやめ」の歌を多く詠む和泉式部の独詠歌である。この二首は、¹²⁴⁸番の詞書「この精進する男のもとより、」の言葉で¹²⁴⁶番が¹²⁴⁸番につながり、「六日」「昨日のあやめも知らで過ぐして」という言葉で¹²⁴⁷番と¹²⁴⁸番がつながる。間に¹²⁴⁹番に和泉式部らしい抒情のある歌を入れ、三首連なる形になり、そこにまず配列の工夫がある。後の三首は、間の詞書「詣づる程になりて」により、前三首との連続が成り立つ。なお、この後の三首は狩衣を仕立てた時にすでに一群として詠まれたのであろう。滑らかに連続している

からである。そしておそらく別の時に詠まれた前三首と併せて歌群としたのではないだろうか。それは内容が、前三首がまだ恋愛中の独り居の女の寂しさを詠むとすれば、後の三首はすでに夫婦として馴れきった夫と妻のやりとりで、少し雰囲気が違うのである。このあたりに、何か意図があるのではないかと考えられる。

結果として、男の人物像が鮮明になり、男の身勝手な行動はむしろ滑稽味すら感じさせる。女はその男の行動に応えつつ、自身の思いとは乖離していくのを感じている。しかし、男に寄り添う気持ちには捨てられず、それ故に孤独をいつそうかみしめなければならぬ女の悲哀ということが歌群のテーマとなろうか。

そのあたりの表現が、この歌群に見られる和泉式部の物語へにむかおうとする意識と考えられる。

③ 疾うを来よ歌群

次にあげる歌群について、拙稿「和泉式部の『桜』の歌^{注8}」において歌の考察をしているので、ここでは歌の語釈、解釈は最小限にとどめ、配列について考察する。

桜のいとおもしろう咲きたるを見て、往にし人のもとより、「散らぬ先に、今一度いかで見む」と云ひたるに、

¹⁴⁵⁰ 疾うを来よ咲くと見る間に散りぬべし露と花とのなかぞ世の中

といひやりて待つに、日比になりぬれば、いひやる

1451 来まじくは折りてもやらん桜花風の心にまかせては見じ

といひたれば、「なかなかあだの花は見じとてなむ」と云ひ

たるに

1452 あだなりと名にこそ立てれ桜花霞のうちに籠めてこそをれ

同じ頃、女客人の詣で来て、物語などして帰りぬるに

1453 我が宿の花を見捨てて往にし人心のうちはのどけからじな

松竹などある中に、桜の咲けるを見て

1454 常磐なる物ともやがて見てしがな松と竹との中にさくらを

詞書を見ると、1450番の「桜のいとおもしろう咲きたるを見て」

は、「見て」の主体は誰であろうか。前稿では「往にし人」として、

「往にし人」が和泉式部の家の桜をすなわち近くまで来てきれいだ
と思つて、あるいは通りがかりに見て、「散らぬ先に、今一度、い

かで見む」と云つてきたと解釈し、桜を口実にもう一度会いたい

と云つてきたという意であるとした。しかし、これまで数種の歌

群を創意性という点から考察してきたことから、この詞書にも言

葉通りではなく工夫がされているのではないかという点から考え

ると、特に通りがかりであるとか、垣根越しとかの状況を考える

必要はなく、桜の季節に「往にし人」から「散らないうちにもう

一度、ぜひともう一度会いたい」という消息が来たのを、詞書

を付けるとき、和泉式部が推測して追加したものではないだろう
か。その意味で「見て」の主体は「往にし人」であろう。

1450 番は「疾うを来よ」、「咲くを見る間に散りぬべし」と呼びか
け、訪れを促している。これは「散らぬ先に」と言つてきたこと

に對しての返歌であるが、女側の返歌としては、普通待つ気持ち
を込めながらもはぐらかして返すのが常道であるから、「疾うを来

よ」というのはとても異例である。「今一度」という男の言葉は、

和泉式部にとつて嬉しかつたのであろう。「疾うを来よ」という呼

びかけはその気持ちの表れであらうが、一方で置けばすぐ消える

露と、咲けばすぐ散る花はそれぞれがもろいほかないものであり、

それを組み合わせた「露と花の中」と男女の仲は同じくらしいも

ろいことであるのをよく認識しており、本当は不安をぬぐい去る

ことは出来ないであろう。別れたあとでその相手にこの「露と

花とのなかぞ世の中」と詠むことは、おそらく、和泉式部には思

い入れのあつた男であつたが、幾ばくもせずに別れることになつ

てしまい、あるいはお互いに心の痛む別れ方をしたのかも知れな

い。

1451 番の詞書では、「といひやりて待つに、日比になりぬれば、い

ひやる」と、男はあらわれず、ここで数日の時間の経過が示され

る。1450 番の歌には反応もなかったのか、「いひやる」の語が二回も

出てくる。躊躇しているだろう男に対して、さらに積極的に「来まじくは折りてもやらん」と詠み、後半は「風の心にまかせろ」という古今集巻第二春歌下貫之の「87山たかみ見つゝわが来しさくら花風は心にまかすべらなり」以来の表現で我が家の桜を風にまかせて散らせることを、反対に「見じ」としている。

1452番の詞書ではこの1451番に対して、男も古今集巻第一春歌上読み人しらず「62あだなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり」の表現を使って男は会いたいと言ったものの、男はなまじつか会わない方がいいと思ひ直したもののか、和泉式部を何かと噂の多い「あだの花」になして、それを理由に退きつつ云ってくる。

返歌の和泉式部の歌は大胆にも古今集の前掲の古今集62番と巻第二春歌下良岑宗貞「91花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風」の上句を合わせており、同時に62番下句の意も汲み、「年にまれなる人もまちけり」と切に「待つ心」示し、桜を「霞に込めて」、「あだな花」ではないと詠んでいるのである。

この三首は和泉式部からの強いアプローチの気持ちを感じ、古今集を詠み込みながら表現している。

1453番もやはり古今集を踏まえて、前の二首に連続する。同じころ、女の来客があり、物語りをして帰ったあとに詠まれた1453番は

古今集巻第一春歌上の躬恒の歌「桜の花の咲けりけるを見にまうで来たりける人に、よみて、それが贈りける 67わがやどの花見がてらに来る人はちりなむのちぞ恋しかるべき」をふまえている。「我が宿の花を見捨てて往にし人」と古今集の上句のリズムそのままに詠んでおり、この「往にし人」は女客ではなく応答を続けた男である。下句はおのずと古今集巻第一春歌業平「53世のみにたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし」の下句を詠みかえている。この1453番は「往にし人」との直接の贈答ではなく、女客と桜がたりなどをして、帰ったあと、結局訪れてきそうもない男を思い出している詠嘆であろう。

これまでの歌を詩の構成にたとえて言えば、1450番が「起」、1451番が「承」、1453番が「転」にあたるだろうか。そして「結」の部分が次の1454番である。

「松竹などある中に、桜の咲けるを見て」とあるのは、後撰集巻第二春中坂上是則「前栽に竹の中に、桜の咲きたるを見て 54桜花今日よく見てむ呉竹の一夜のほどに散りもこそすれ」という歌も見られるので、前栽の中に桜が咲いていたのだらう。この歌は一見すると独立した歌のように見えるが、松と竹の中に咲く桜を、松と竹と同じように変わらない物としてずっと見ていたものなのだという歌は1450番の「咲くと見る間に散りぬべし露と花とのな

かぞ世の中」に見事に対応して、「結」となっているのである。

「常磐なるもの」、無常ではないものとして桜が永遠に咲いていてほしいという詠嘆は、「散らぬ先に会いたい」という男に期待を抱き頼みにしたものの、それとは裏腹に結局来なかったことに対する失望や、悲しみも含めて詠み込まれている。一連の歌の末尾は結局松竹を引き合いに桜（人の気持ち）の無常なるものを詠む歌で締めくくられている。

以上のようにこの歌群の創意性は明らかであろう。「桜」をめぐる人間関係が、和泉式部自身の期待、不安、諦め、嘆息といった順に配列されてひとつのエピソードを作り上げているのである。

三 まとめ

和泉式部の歌の中で物語性を意識していると思われる歌群はいくつかあり、特に重出歌のあるものはその比較において論じられている。この重出歌があるゆえに、①の歌群見られるような双方の違いがより際だち、そこに創意工夫を見て、それが和泉式部自身によるものか、あるいはそれが晩年にまとめられたものか、事実かどうか、まったく第三者の手によるものかいろいろ論がでてくることになる。ここでは配列に注目しての創意性を考察したので、それ以外の点については言及はしていないが、多少の時間

をおいて和泉式部式自身がまとめたものと考えている。

また、②、③については、重出歌も、他出もない歌の歌群である。この両歌群については考察してきたように、詞書によって非常に巧みに状況と歌を連続させて配列しており、歌も表現技法もさることながら、人と関わりながらも常に孤独な女の心情の推移も追うことができるのである。これは和泉式部以外の他者によって編むことができるものであろうか。

「物語性」という定義が難しく、曖昧にもなるので、この論文ではあえて「エピソード」と称した。このようなエピソードをまとめられるということは、『和泉式部日記』の作者としての本質を表すものであり、和泉式部自身の編纂意識の物語志向を示すものであると考えたい。

注

注1 『國史大系 延喜式 後篇』（吉川弘文館 昭和47）

注2 『和泉式部集全釈』正集篇、佐伯梅友・村上治・小松登美著（笠間書院 二〇一二）続集篇（笠間書院 一九九七）

注3 柿原本私家集（一）日本古典文学影印叢刊9（貴重書刊行会 一九七八）

注4 『平安中期和歌考論』平田喜信著（新典社 平成5）

注5 『和泉式部歌集の研究』清水文雄著（笠間書院 二〇〇二）

- 注6 藤岡忠美『和泉式部集の成立』(国語と国文学 28巻5号 昭和26・5)
- 注7 『枕草子』松尾聰、永井和子校注・訳(新編日本古典文学全集18 講談社 一九九七)
- 注8 『近衛府補任 第一』市川久編(統群書類従完成会 平成四)
『平安人名辞典 長保二年』榎野廣造編(高科書店 一九九三)
『権記 上、中』藤原行成著 倉本一安全現代語訳 講談社学術文庫(講談社 二〇一、二〇二)
- 注9 注8と同じ
- 注10 『紫式部日記 紫式部集』山本利達校注(新潮日本古典集成 新潮社 一九八〇)
- 注11 青木賜鶴子『和泉式部集』一〇七番歌詞書『蔵人の少将』をめぐって(『言語文化学研究 日本語日本文学編8』二〇一三・三)
- 注12 『平安人名辞典 長保二年』榎野廣造編(高科書店 一九九三)
- 注13 『近衛府補任 第一』市川久編(統群書類従完成会 平成四)
- 注14 『和泉式部日記・紫式部日記・更級日記・讃岐典侍日記』藤岡忠美・中野幸一・犬養廉・石井文夫校注・訳(新編日本古典文学全集26 小学館 一九九四)
- 注15 『中古歌仙集(一)』松本真奈美・高橋由記・竹鼻績著(和歌文学大系54)(明治書院 平成16)
- 注16 『三十六歌仙集 二』新藤協三・西山秀人・吉野瑞恵・徳原茂実著(和歌文学大系52)(明治書院 平成24)
- 注17 『賀茂保憲女集・赤染衛門集・清少納言集・紫式部集・藤三位集』武田早苗・佐藤雅代・中周子著(和歌文学大系20)(明治書院 平成12)
- 注18 『平安私家集』犬養廉・後藤祥子、平野由紀子校注(新日本古典文学大28)(岩波書店 一九九四)
- 注19 『大鏡』橘健二・加藤静子校注・訳(新編日本古典文学全集32)(小学館 一九九四)
- 注20 拙稿『和泉式部とあやめ草』(東京女子大学紀要「論集」第3巻2号 二〇一五・三)
- 注21 書誌は注15と同じ
- 注22 『小町集・業平集・遍昭集・素性集・伊勢集・猿丸集』室城秀之・高野晴代・鈴木宏子著(和歌文学大系18)(明治書院 平成10)
- 注23 『神楽歌 催馬楽 梁塵秘抄 閑吟集』白田甚五郎・新間進一・外村南都子・徳江元正 校注・訳(新編日本古典文学全集26)(小学館 一九九四)
- 注24 注23と同じ
- 注25 『角川古語大辭典』中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義(角川書店 一九八二・一九九六)
- 注26 『蜻蛉日記』(新潮日本古典集成 犬養廉校注 新潮社 一九八二)
- 注27 注15と同じ
- 注28 拙稿『和泉式部の「桜」の歌について』東京女子大学紀要「論集」第67巻1号 二〇一六・九

(かねこ のりこ 博士後期課程在籍)